所属：高知工業高等専門学校　ソーシャルデザイン工学科

研究タイトル：女性が沖縄で文学を書くということ ～<歴史>と<記憶>の位相～



氏名：	翁長　志保子／ONAGA Shihoko	E-mail：	onaga@kochi-ct.ac.jp
職名：	准教授	学位：	修士（文学）
所属学会・協会：	日本近代文学会、日本社会文学会、日本女性学会		
キーワード：	沖縄近現代文学、日本近現代文学、地域連携、反転授業・アクティブラーニング		
技術相談 提供可能技術：	・地方における女性文学（主に沖縄など）に関する研究 ・「土佐日記」やビブリオバトル等を用いたアクティブラーニングを用いた国語授業の実践 ・文学や国語教科に関わる講座などの地域連携教育		

研究内容：

◆研究概要

沖縄や日本近現代文学の中でも、女性作家の営みに着目し、女性が書くことをめぐる言説やその権力構造について研究しています。例えば沖縄は嘉手苅林昌が「唐の世から大和の世／大和の世からアメリカ世／ひるまさ変わたる／此ぬ沖縄（ウチナー）」と歌ったように、東アジアを取り巻く様々な国の政治に翻弄されながらも、沖縄の人々はその土地で生を営んできました。第二次世界大戦後は、1952 年のサンフランシスコ講和条約に基づく安保体制維持のため、1972 年に日本へ施政権が返還されるまで、アメリカの直接統治下におかれました。しかし、施政権返還以降も沖縄には広大な米軍基地が残され、人々は基地から被る政治・社会・環境などの様々な問題と戦わねばならぬ状況が続いています。<復帰>を中心に、運動などの政治的・社会的なことに関わった人々の生は、ある程度<歴史>に刻むことができますが、個別の生をいきた人々の<記憶>は忘却されつつあるのが現状です。個々の身体に保有され、その個の死とともに忘却・廃棄されていく<記憶>に、文学はどのような応答が可能なのかという点に興味・関心があります。こうしたインターセクショナルな生を生きるのは沖縄の人々に限りません。現在では、文学の応答可能性を念頭に、障害文学にも興味を広げています。

また、こうした文学研究の成果を活かした国語教科の教授法や教材開発にも興味・関心をもって取り組んでいます。そのなかでも、主体的に思考することを要するアクティブラーニングを用いた授業について関心を寄せて実践しています。

◆研究テーマと成果の例



（1）1980年代沖縄における女性作家の存在感

80年代以前、沖縄における文壇は大城立裕などの男性作家によって担われていました。しかし80年代になると、雑誌『新沖縄文学』を中心に、女性作家の作品の受賞が相次ぎます。女性作家たちは「個人的なこと」を「女性ならでは」の視点で描いたとして評価されますが、むしろそこで彼女たちが描いたのは、女性という属性に還元されない、権力による生への介入だったのではないかと私は考えています。作品の分析を通して、そうした今にも続く生への介入を問う研究しています。

（2）女性作家が描く障害文学から読む戦後日本社会の矛盾



女性作家が描く障害文学を対象に、ジェンダーと障害が交差するインターセクショナルな困難の構造を分析しています。戦後日本における障害当事者の抑圧と抵抗、優生思想に根ざす差別の「感性」の文学的表象を考察することで、近代国家が形成してきた規範的人間像の限界を批判的に描き出し、より多くの人々が生きられる社会空間創造に向けた新たな批評的視座の可能性を研究しています。

（3）高専教育におけるアクティブラーニングの実践と効果検証

5年間の一貫教育を受け、技術者として社会に出ていく学生たちは、社会において即戦力としての力を望まれます。その学生たちの問題を発見・考察・解明する能力を養うために、アクティブラーニングを導入した授業を行い、主体的な学び・協同性を習得させることを目的とした授業を開発しています。また、授業の一環としてビブリオバトルを取り入れ、主体的に作品を読み、語ることのトレーニングを行い、より効果的な手法についても研究しています。